



TITLE:

日食斷片

AUTHOR(S):

---

CITATION:

日食斷片. 天界 1929, 9(98): 279-283

ISSUE DATE:

1929-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161413>

RIGHT:

# 日食断片

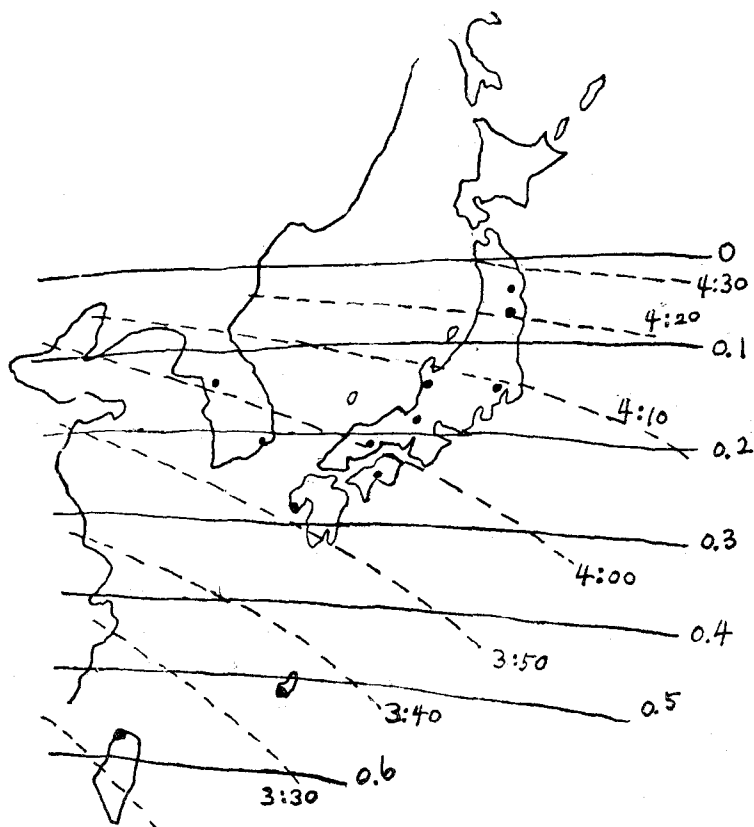
## 日本から見る本年五月九日の日食

本年五月九日の日食が、我が日本からは所謂「部分食」であることは今までも記した所であるが、国内の各地で此の部分食の見える有様を表はすに、次表の通りである。（本年度の天文臺年鑑から）

地名	食分	初 虧		食 甚	復 圓	
		時 刻	位置角		時 刻	位置角
台北	0.56	3 23.3	148°	4 31.9	5 34.0	28°
京城	0.13	4 0.4	133	4 34.4	5 7.1	75
釜山	0.21	3 55.3	138	4 37.0	5 16.4	65
那覇	0.51	3 35.3	148	4 38.3	5 35.4	35
長崎	0.28	3 50.4	142	4 38.4	5 23.2	57
高知	0.24	3 56.9	140	4 40.5	5 21.4	62
倉敷	0.21	4 0.1	139	4 40.0	5 18.2	65
岡山	0.21	4 0.2	138	4 40.4	5 18.4	67
京都	0.19	4 3.2	137	4 41.0	5 16.9	69
金澤	0.13	4 8.7	133	4 40.6	5 11.3	76
東京	0.15	4 9.6	134	4 42.4	5 13.8	75
仙台	0.06	4 20.6	126	4 41.3	5 1.6	89
水澤	0.03	4 26.1	122	4 40.7	4 55.4	95

このうち、食分を、初虧の時刻を地圖上に表はしたものが別圖の通りである。（時刻は皆、日本中央標準時で表はしてあるから、臺北のためには之れより一時間だけ早い時刻の時計面を注意しなければならない。）

此の圖で見てわかる通り、青森縣以北は全く蝕の現象が見えない。岩手縣や秋田縣でも、肉眼観測は駄目である。仙臺以南の土地では煙りガラ



ス等の方法によつて観測が出来るだろう。

部分食の場合に、學術上、研究すべき問題は、食の初めと、終りとの時刻を精密に観測することである。出来得べくんば、一秒の十分の一までも正確精密に決定するのが望ましい。そして、其の結果を本會観測部に通知して貰ひたい。しかし、自己の持つ時計の時刻を、一秒の十分の一ぐらゐまで正しく維持することは可なり困難である。京都か東京の天文臺の標準時計と比較するか、又は、船橋無線局の時刻放送と比較するより外に好い方法はあるまい。但し、神戸の海洋氣象臺、長崎の報時観測所、臺北の測候所あたりにある標準時計と比較しても好い。

## 日本人が参加した過去の日食

近代の天文學が我が日本に紹介されて以來こゝに約五十年、此の間、わが領土の内でも數回の皆既日食があつて、日本の學者が此等の場合には多く何等かの働らきをやつてゐるし、尙ほ、此の間、外國に居て、日食觀測に加はつた例も少なくない。今此等のレコードを列記して見るこゝ、下の通りである。

**明治二十年(1887年)八月十九日** 此の日は能登、越後、岩代、磐城あたりの地に於いて、午後3時前後に皆既日食が見えた。此の時米國からはトド D. Todd 博士等が來朝し、白河の城趾に器械を据えたが、天氣は曇りであつた。

**明治二十九年(1896年)八月九日** 此の日、北海道の北部で日食皆既があつた。米國からはトド博士、佛國からはデランドル H. Deslandres 博士(現バリ天文臺長)等が來朝して、北見の枝幸に器械を準備し、我が國の寺尾、國枝、水原、樺諸氏も同所で觀測の準備をしたが、あひにく空は曇つた。

**明治三十一年(1898年)一月二十二日** 此の日、インドで皆既日食があつた。我が國からは東京天文臺の寺尾壽、平山信、木村榮三氏が觀測のため、印度マドラスへ出張。

**明治三十四年(1901年)五月十八日** 此の日、蘭領スマトラ島の中部に日食皆既があつたので、我が日本からは東京天文臺平山信、平山清治、早乙女清房三氏が同島パダン Padane に出張、見事な成績を得て歸朝された。

**大正四年(1915年)八月十一日** 此の日、小笠原諸島で金環食が見えたので、東京天文臺の早乙女、橋元昌矣、上田穰三氏が出張された。

**大正七年(1918)年六月八日** 此の日、伊豆の南沖の鳥島で早朝に皆既食が見えたので、京都大學の山本一清、上田穰、山本六郎、柴久光四氏と、東京天文臺の帆足通直、河合章二郎二氏とが研究のため出張した、しかし天氣は薄雲りで、觀測は妨けられた。

**大正十二年(1923年)九月十日** 此の日、北米カリフォルニア州南部で皆既日食があつて、世界各國から観測者が多く集まつた。我が日本の山本一清氏と同英子氏が此の日カタリナ島のヤーキース天文臺観測隊に加はつてゐるが、天氣は曇りであつた。

**昭和二年(1927年)六月二十九日** 此の日、英國中部では 200年ぶりの皆既日食が見え、多くの観測隊が観測したが、此の時たまたま英國に留學してゐた白鳥勝義氏(現に臺北帝國大學助教授)はグリニチ隊に加はつて、ギグルス井ク村で之を観察した。

### 過去及び將來の日本の日食

皆既日食は、部分食もちがつて、一ヶ所に待つてゐるのみでは、なかなか見る機會は無いものである。早い話が上の例で見ても、一昨年英國で見た日食は實に 200 年ぶり(詳しく言へば、實に 202 年ぶり)だから、當時彼の地の人々の騒は想像以上らしかつた。そして今後また英國で日食皆既が見えるのは西暦 1999 年(今後 70 年目)であるといふ。

我が日本は、地理的に、英國よりももつこ廣がつてゐるから、上記の例はぎひぎいこは無いけれぎ、それでも、下記の如き有様である。

1887年(明治20年)八月19日、	新潟縣、福島縣あたり。(午後3時頃)
1896年(同 29年)八月 9日、	北海道。(午後2時頃)
1918年(大正 7年)六月 8日、	伊豆の南の鳥島。(早朝)
1936年六月19日、	北海道。(午後3時頃)
1941年九月21日、	沖縄。(午後1時頃)
1943年二月 4日、	北海道。(午前8時頃)
1963年七月20日、	千島。(朝4時頃)
2009年七月22日、	奄美大島。(午前11時頃)
2035年九月 2日、	京都大阪地方。(午前10時半頃)
2063年八月24日、	東京地方。(午前10時頃)

かういふ次第であるから、日食コロナの美觀を親しく見やうと思ふ者は成るべく海外に出かけて行くより仕方が無いわけである。

## 最近の日蝕を見た實感

(去る1927年六月29日、英國にて或る人が日蝕を見た感想の断片)

太陽の皆既蝕は英國民を悉く天文家にしてつた。——其の六ヶ月も前から學者たちが日々の新聞雑誌上で此の現象を説明し續けたのだから、實際、英國内の所々で、今までに例のない珍景が見えたのである。殊にクリシースからハートルプールまでの線に沿うて、幅30マイルの廣さにわたる地方は月の影が晝の世界を夜に變へるまじふものだから、幾百萬に數へられる見物人たちが此の界限に集まつて來て、其の前夜からの騒ぎを言つたら、全くごうも、夜を晝に變へるやうな有様であつて、御役人たちも此の日は種々の規則や規定をゆるめて總てを大目に見るこゝなり、ダンスも、芝居も、シネマも、樂隊も皆人の群集をはしやがせ、到る所で店々も夜中開かれてゐた。

蝕は5時26分 から始まり 6時13 分に皆既となり、其れが 24 秒の間續いた。そして蝕の終りは7時23分であつた。

蝕は實にすばらしい、恐ろしく物凄い景色であつた。ヨークシャーのギグルスバンク町は此の皆既食を見るのに最も都合の好い所なので、グリニチ天文台の勅任天文博士と其の一行は觀測の場所を此所に撰定した。此の日の朝早くから、空には日と雲の間には呼吸もつけないやうな劇的な争闘が續けられたが、いよいよ最後の一瞬間に日が勝を占めた。

蝕が始まると共に、光りは淡く、灰色から褐色に變り、空氣は急に冷つくくなり、沼の水の上には一陣の風が吹き過ぎた。暗い影が恐ろしい速度で大地を掩ふた瞬間、鳥々は歌ひ聲を止め、羊は哀しさうに鳴いた。

觀測者の中の一人が時計の秒を読む鋭い聲が沈黙を破つて劇的に聞える。其の附近の小山に群がつてゐる群集は恐れ戦き、皆既食になるや否や、金銀の光が見えざるルツボからの如く、コルナから現はれた、それから、觀測者が第23秒を數へ終ると共に、天からは、光が見えて來た。